

「Do you know 能？」第二弾 ～ガイドなら一度は観ておきたい能楽～

2016年1月9日実施 JGA 第一支部研修 終了レポート

2016年1月9日、独立行政法人日本芸術文化振興会 国立能楽堂においてJGA 第一支部能楽研修を実施し、30名（会員26名、非会員3名、運営委員1名）が参加しました。

今回の研修は、①能楽の基礎知識レクチャー、②研修用能舞台体験（カルチャー教室参加者と合同）、③能楽鑑賞 の三部構成です。また、能楽堂営業課の羽鳥道成氏のご厚意で、資料のほか、能楽堂特製の卓上カレンダーが参加者全員に配られました。



①、②とも、講師は国立能楽堂営業課長 吉成大四郎氏で、①では能楽の歴史など基礎知識を要領よくご説明くださいました。会場を移動していざ②能舞台体験へ。持参の白足袋に履き替えます。



普段研修生が稽古に使っている研修用とはいえ、楽屋、鏡の間から橋懸かりを通過して檜舞台に立つという滅多にない体験に参加者は興奮気味です。吉成氏から摺足で歩くよう促されますが、そう簡単には出来ません。檜舞台に立つと、何か心が引き締まる心地がします。ここで舞台の構成や能役者の動きなどについてさらに説明を受けました。面（おもて）の実物も拝見し、目の穴の小ささに視野の狭さと不自由さを実感。レクチャーの最後に能舞台で記念写真を撮影。全員どこかきりっとした表情になりました。因みに研修用能舞台の檜は台湾産、本舞台は日本産だそうです。



③はあの林望先生による「忠義と人情」というテーマの解説と能楽案内から始まりました。今日の狂言「麻生」（大蔵流）は新春らしくめでたい内容。能「仲光」（観世流）は、悩んだ末に主人の子の身代りに自分の子を討つ藤原仲光がシテで、主人と子がめでたく和解したことを祝って舞う、その中ににじむ苦悩と悲哀の表現がみどころ。林望先生の解説は非常にわかりやすく、好評でした。

新春で注連縄が張られた能舞台。狂言「麻生」（大蔵流）は、舞台の上でシテ麻生何某（山本東次郎）の髪をアド召使の藤六が烏帽子髪に結うなど、珍しい場面があります。また、能「仲光 愁傷之舞」（観世流）は全員が面をつけない直面（ひためん）物で、シテ仲光（大槻文蔵）と直情型で他人の苦しみに無頓着な主人（ツレ、観世鍊之丞）の関係は今に通じ、失くした子を想い苦悩しつつ舞う仲光の姿に思わず泣けます。どうしようもない状況での人間の葛藤や哀しみ、諦観をしみじみ感じさせる演目でした。